

遊湯



第一回

奥伊豆山間の一軒宿

『観音温泉』

緑豊かな山間に静かなたたずまいを見せる一軒宿。浸かってよし、飲んで良しの温泉は自然の大きい恵み、もてなしの食事にも温泉水が使われ、内外から癒される。今回は伊豆半島にある「観音温泉」をご紹介します。



No.001
伊豆半島奥下田「観音温泉」

が分かった。それは来湯者の入浴体験、飲用などによって多くの人に証明された。

宿は、滞在用にはいい和風の産土亭（13室）、先頃大リニューアルして、各部屋に半露天のヒノキ風呂の付いた本館（12室、特別室4室）、高級料亭風の「ピグマリオン」（18室）、大衆向き の正運館（6室）、などに、大浴殿「観音乃湯ガラティア」などが重なり合うように並び、山の中の一軒宿とはいうものの、数棟で形成する一つの湯街のようであった。

総ヒノキ造りの大浴場に早速入った。ヒノキの浴槽は、ヒノキの肌ざわりと、つるつるする湯の体にあたる刺激がなんともいえない。「美肌の湯」といわれるのを実感する。浴槽の中央には飲泉塔があつて飲用しながら入浴を楽しむ。露天風呂のほか、ジェットバスのアメリカンスパもある。

「女性優待の風呂ですから」という女性風呂の露天風呂からは、ときには目の覚めるような神秘的な夕陽が眺められるという。

「自然にこだわる」という宿の方針は、食事にも充分に生かされている。旬の野菜、その日に揚がった海の幸の刺身、イセエビのお造りなどを主にした「温泉会席料理」。自家製、手造りの梅干し、ひとくちトマトなどが温泉水と一緒に食卓に並んでいた。

鈴木社長はいう。「温泉は大地の恵みです。これを皆さんによくこんで使っていたらいい。飲用すれば人間の胃腸への影響が大変良好なことも証明されています。社会へ少しでも還元できたらと思っています」。その心は大切にしなければいけないと思った。



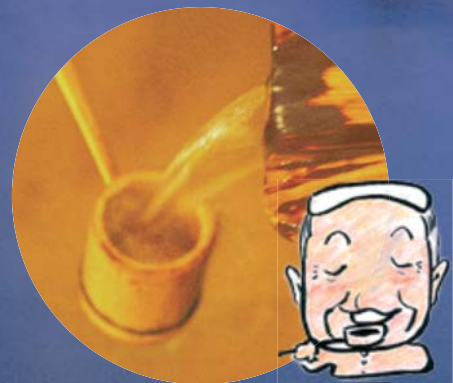
鈴木社長自ら箱詰めする自家製梅干しは、まさに懐かしの味！



もてなしの心は料理にも反映されている



足を伸ばせば開港の街「下田」へ家族旅行にも最適な場所



浸かるだけでなく飲むこともでき、体の内外から癒される。

「体の調子が悪かった、肝臓の数値がよくなかった、糖尿病の症状が改善された、飲める観音温泉のお水を毎日いただいで、掛かり付けのお医者から不思議がられるほど長くなりました」。おいでになったお客様から、感謝のお手紙をいっぱいいただいでおります。ありがたいことです、と鈴木和江社長はおっしゃる。

ぐるりと山に囲まれた「観音温泉」。自然があふれている。伊豆半島の先端に近い横川の源流圏、まさにすり鉢の底のような地形を見せている。

昭和44年の春、温泉開発を目指した先代の小林連正氏が、日本古来の探湯法によって、源泉を掘り当てた。その際に、夢枕に立った観音様のお告げにちなんで、「観音温泉」と名付けた。泉質は分析の結果、たいへん良質のアルカリ性単純温泉、それも飲用効果もたいへん高いこと

野口冬人

旅行作家であり温泉評論家でもある。温泉関連の著作が多く、読売旅行など温泉関連の連載を多く抱える。出身は東京都。昭和48年に設立した株式会社現代旅行研究所代表のほかに、旅行作家の会代表、日本山書の会、山村民俗の会会員、NPO法人健康と温泉フォーラムへも参加している。全国の露天風呂を評価した、露天風呂番付の作成者としても有名である。

